

有和顔之色、殆及悦歟、仍於今者、存不可奉秘之由所持參也云々、持來第四卷、第靈魂感愚臣之心操、忽許相見歟、可悦々々、可憐々々、

〔太閤記〕秀吉公素生

爰に後陽成院之御宇に當て、太政大臣豊臣秀吉公と云人有、略中或時母懷中に日輪入給ふと夢み、已にして懷妊し誕生しけるにより、童名を日吉と云しなり、

〔伊勢大神宮神異記〕上七月二年萬治

廿三日の曉夢中に、予延度會が背の方より、右の耳に告て云此

事争は五日の中に相濟なりと、次に歌一首となへける、

むすびあげて五十鈴の川の川水の久しき代々をなほや仰がんと云と覺て夢さめたり、傍に

寝たりし、岩出氏秦末清をおこして、かくのごとき靈夢の告ありといへば、即時筆とりて書留け

り、略中先日戲ぬる人も驚き、廿三日より今日二十は五日也、前知たゞ事にあらず、いか様にも

神明の告給なるべしと、感歎不斜、

〔兔園小説九〕奇夢

いぬる八月二年文政二十五日の夜半に、日向稱名寺淨土真宗號す、余が菩提所なり、といへるに、盜賊入り

たり、このごろはその邊處々に賊の入るよし、人々心を付くる折なりしに、其夜納所の僧義山と

いふものいかゞしけん、子の刻過くるまでいねられずありしに、丑の時ばかりに、ぬるともしらす

ずまどろみし夢に、賊四人おし入り、各手に白刃を提げて、義山をおし伏せ、刃をつきつけ、住持の

居間に案内せよと、責めらるゝと見ておどろきさめぬ、略中

乙酉文政八年九月朔

海棠庵誌

〔甲子夜話四〕著聞集ニ鬼ニ瘤ヲ取ラレタルト云コト見ユ、是ハ寓言カト思フニ、予浦清ガ領内ニ正シク斯事アリ、肥前國彼杵郡佐世保ト云フ處ニ、八彌ト云農夫アリ、左ノ腕ニ瘤アリ、大サ橋實